

## 随筆再掲載



### ブラス・ファンタジー

#### 團 伊 玖 磨

自分の今迄の生活の中で、ブラス類に最も関係が深かった時代は、戦争中、兵隊だった頃だった。何故なら、僕は戦争中陸軍の音楽隊員となつてブラス・バンドの中に暮らしていたからである。御承知のように、ブラス・バンドに用いられる楽器は、ブラス・バンドとの名前が示すように、真鍮製の楽器が圧倒的に多い。木管属のフリュート、オーボエ、クラリネットを除いた他の全部の楽器は、殆んどすべてと言って良い程が真鍮製である。思い出すままに書いてみても、トラムベツト、ホルネット、ヴェーダール、サクソフォーン、サックス、ホルン、アルト、バリトン、小バズ、中バズ、大バズ、チェーバ、ストザホン、そして、吹奏楽器で無いものでも、小太鼓の胴、ティムパニの胴、皆ブラス製である。

何故、吹奏楽器が真鍮で作られるかは、僕がこの専門誌で申し上げるまでも無いことだが、その

柔かさのために、管楽器として構造上必要な幾重にも曲がった管や、デリケートな細工がしやすいこと、又、唾液によつて侵されないことも重大な理由だが、やはり、何と云つても、楽器の使命として最も重要なことは、音が良いということに他ならない。

真鍮管楽器の音色というものは、何とも音楽の中のあるゆる音色の中で最も男性的に輝やかしく、喇叭の唳々たる音色の素晴らしいは、どんな大型の編成の管絃楽の中でも、他を圧倒し、他の音の渦の中を突き抜けてこちらの耳に届く不思議な力強さを持っている。

管絃楽の作曲をしていて、いつも心に忘れてならぬことは、演奏（フォルテ）の場合、木管属はホルン属の工度半分の音力しか無く（つまり、フリュートとホルンを、同じバランスを持った二声に組み上げるためには、一本のホルンに対して、

木管を二本一緒に重ねて吹かせることで対抗せねばならぬということ）、そのホルンは、トラムベツトやトロンボーンに較べて又半分の音力しか出せぬということ、つまり判りやすくいえば、フリュートやクラリネットのような木管属を四本東にしたものでよりより一本の喇叭に対抗出来るという意味であつて、又、木管属一本に対して、ヴァイオリンのような絃は十五人ぐらい力を合わせねば良いバランスを作り上げることは出来ないのである。以上述べた数学（？）の結果、喇叭一本の音力に対抗するには、絃は六十五人要ることとなり、オーケストラの中にはどうしてあんなに絃が多いのかという誰でも抱く疑問の答えがこの数学なのである。

従つて、野外で演奏して士気を鼓舞しようということとなると、どうしても音力の強いブラス楽器を中心とした吹奏楽が良いということになり、管絃楽は室内、室外はブラス・バンドということになる。絃楽器は雨に濡れてはおしまいが、管楽器は雨の中でも音が出るし、又、歩きながらも吹けるという利点もある。

軍楽兵としての思い出には、随分辛いことも、楽しいことも多かったが、やはり印象に強く残っているのは、大行進の折りに起こったさまざまな出来事である。街中を唳々たる音で圧倒しながら、あらゆる交通機関をとめて、二百人の音楽隊が一糸乱れぬ歩調で堂々と進んで行く時の壮大な

気持ちには、一寸表現しようの無いものである。

たしか昭和二十年の二月の半ばのある日、われわれは大雪をおかして、全軍楽隊の大行進を組んで、靖国神社から銀座方面に向けて出発した。曲はその頃出来た「大防軍行進曲」であった。風と雪が入り混じり、鼓手であった僕は小太鼓を叩きながら先頭を歩いていた。軍楽隊の行進の組み方は、先頭が小太鼓群、ついでピッコロ、フリューイト、オーボエなどの高音群、次がクラリネット、それから真鍮管楽器が続々と続き、最後に大太鼓とバス群及びスーザホーンがしなりを成す。雪はますますひどくなって、小太鼓の皮の上にも積もり、かじかんだ手を我慢して叩いている楽器は、ポコポコと貧相な音を立てていた。

千鳥が淵に沿って、赤坂見附に本隊がさしかかった時、僕たちは後方の低音が聞こえなくなったことに気付いた。しかし、当然うしろを向くことは御法度である。低音のない行進曲は、一寸動きかねる音を立てながらも、堂々と銀座方面をさして進んで行った。

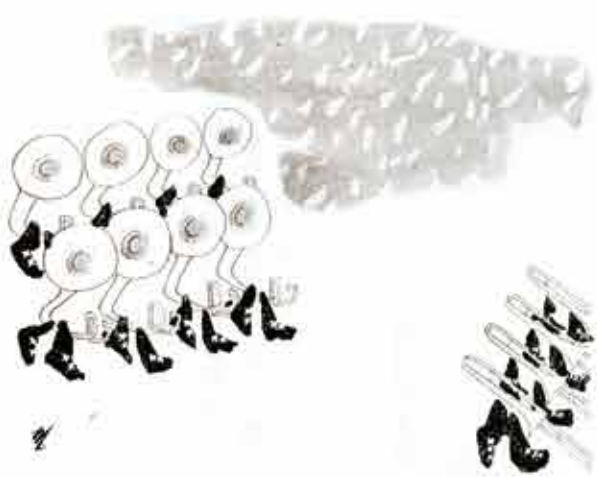
虎の門で小休止ということになって、演奏行進をやめた僕達は、無道で休みながら、かじかんだ指をあたためていた。すると、遙か遠くから雪の中を、肩に超大型のスーザホーンを巻き付け、低音群がやって来たのである！きちんと四列に並んだ八名が、足並みを揃え、ド・ソ・ド・ド・ソ・ドと行進曲独特のあの低音を彼らだけで奏で

ながら……。

叱られた彼等は言った。

「向い風がひどくて、自分らは早く歩けないのであります」

超大型のスーザホーンのおさがおは、帆かけ舟が風に向った時のように、彼らの歩行にブレイキ



をかけ、うしろを振り向くことの出来ぬわれわれ本隊は彼等を置いてきぼりにして来てしまったのである。僕は今でも赤坂見附を通るたびに、この時のことを思い出して可笑しさがこみ上げて来るこんなこともあった。

同七年の三月十日に大空襲があつて、その翌朝、空襲で打ちひしがれた都民の士気を鼓舞する

ために、堂々と大行進は出発した。まだ火はいたるところくすぶっているし、架線は道路に垂れ下がり、両側の電柱が黒焦げになって煙を吐いている中を、数人の危険物を取り除けたりする役目の露払いを先に、我々は調亮たる軍楽でこげ臭い四圍を圧しながら進んで行った。

昨夜の空襲の疲労で、焼け跡に立ちつくしていた家を失った人達は、あるいは手を振り、あるいは泣き、手を叩き、士気の鼓舞は上々の成果を挙げているように見えた。ところが、尾張町の角を曲がろうとした時、ほんの一個ではあるが、僕はびくっとする出来事に遭遇した。僕の叩いている小太鼓に、投げ付けられたレンガのかけらが当たったのである。そして皮は破れた。すべては調亮たるラッパの音の中の出来事だったので、隣りの鼓手さえも気が付かず、行進は教習屋橋さして進んで行った。ただ僕は見たのである。一人の男が、憤怒の形相でわれわれの行進を見つめていたのを。彼がレンガを投げたのだ。

彼の目はそれを物語っていた。

「何だ、ピカピカの楽器を持ってブカブカ・ドンドンやりやがって。ふざけるな。バカにするのもいい加減にしろ！俺たちをこんな目にあわせて置いてお前たちは今更ブカブカ・ドンドンか！」

僕は、一瞬の出来事だったが、この男の表情とレジスタンスの気魄に満ちた怒りの目を今でもはっきりと覚えている。 (三井 永一・絵)